

人と人
つながりの物語

illustration: Maiko Dake

コープデリグループの組合員数は約550万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。

76歳になる喜美代さんは、物心ついたところからほとんど視力が無い。「2歳のときに、病気の合併症で白内障になって。手術もうまくいかず、左目で光や色を感じるくらい」という喜美代さんにとって、スーパーまで出かけて買い物をする負担は大きい。安全・安心へのこだわりにもひかれ、40年ほど前から暮らす埼玉県越谷市で、コープのグループ配達を利用している。「当時は商品の仕分けや代金の集金持ち回りの班長もあつたけれど、みんなが『大丈夫。班長はやらなくていいから』と仲間に入れてくれました」と振り返る。以来、食品や日用品の多くをコープで賄ってきた。野菜や肉・魚だけでなく、長期保管が可能な「CO-OP モーニングクロワッサン」や、同居する息子の好きな納豆などをよく頼む。

目の不自由な人のために、1990年に宅配の商品カタログを読み上げて録音したカセット

テープを届ける「リーディングサービス」が導入されると、すぐに利用し始めた。現在は「ハピ・デリー」などの内容が専用のCD（デジ図書版）で届けられ、コープデリグループで約500人が利用している。5000点ほどの商品情報が専任の職員や自動音声で読み上げられるため、1回の注文分で約25時間にもなる。専用の機器で速度を上げて再生し、ページを飛ばすなどしても時間がかかる。でも、これがあれば自分で商品を選ぶことができる。喜美代さんは何日かに分けて聞き、買いたい商品を点字でメモして、まとめて電話注文している。近所の友だちが注文書に記入してくれることも多い。「調理方法の確認などもしてくれま

も新たにした。「毎回膨大な量の商品情報を吹き込んでくださる方、注文内容を丁寧に復唱してくださるコールセンターの方には感謝しかありません」

届いた商品は、大体の物は触れば分かるが、冷凍食品の区別は難しい。「魚の切り身だと思って友だちに確認したら、チヨコバナナだったこともありまう」と笑う喜美代さん。前向きな姿勢や明るさは、6歳まで過ごした奄美大島で育まれたものかもしれない。昔は障がい児を家から出さないことも多かったが、喜美代さんは島のおらかな人々に囲まれてのびのび育った。

今は、趣味のコーラスやサウンドテニス（視覚障がい者が行う卓球）を楽しむ日々を送る。「おいしい食べ物があるとうれしい。元気なのはコープのおかげ」と話す喜美代さんは、これからもできることはできるだけ自分でやりたいと思っている。

過去の物語も
こちらから読めます



あなたのエピソードをお寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便（〒336-8526 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛）か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。